

サポーター会員WEB特別配布版

分析センター 検査室 ニュース

2022年夏号

一般社団法人

農民連食品分析センター

電話 03-5926-5131

power8@nouminren.ne.jp

<http://earlybirds.ddo.jp/bunseki/>



特集・検査データ

おやつのがグリホサート

あれこれ調べてみました

検査データ・ちよびつと中間報告・

水道水のネオニコ調査はじめています

最近の話題

アメリカでもネオニコ系農薬規制の動き？

DVD「浸透性農薬ネオニコチノイドは人にとって安全か？」

サポーター会員WEB特別配布版

表1 身の回りのおやつグリホサート残留検査結果2022

	商品名	ppm		商品名	ppm
1	 カントリーマアム 主原料：小麦粉 (株)不二家	痕跡	11	 国産大豆で作った大豆チップス 主原料：大豆（日本） (株)アルソア慧央グループ	痕跡
2	 チョコパイ 主原料：小麦粉 (株)ロッテ	痕跡	12	 ビネガー香る大豆チップス 主原料：大豆（カナダ） (株)アルソア慧央グループ	検出せず
3	 きのこの山 主原料：小麦粉 (株)明治	0.07	13	 三温糖きなこねじり 主原料：大豆(北海道製造) 札幌第一製菓(株)	痕跡
4	 たけのこの里 主原料：小麦粉 (株)明治	0.01	14	 SOYJOYブルーベリー 主原料：大豆 大塚製菓(株)	痕跡
5	 リッツクラッカー 主原料：小麦粉 モンデリーズ・ジャパン(株)	痕跡	15	 素煎り大豆 主原料：大豆(国産) (株)川越屋	痕跡
6	 小麦胚芽のクラッカー 主原料：小麦粉 森永製菓(株)	0.47	16	 黒豆しぼり 主原料：大豆（北海道） クリート(株)	検出せず
7	 パイの実 主原料：小麦粉 (株)ロッテ	0.10	17	 じゃがりこサラダ 主原料：馬鈴薯((日本・米国) カルビー(株)	検出せず
8	 ビスコ 主原料：小麦粉（米国） 江崎グリコ(株)	痕跡	18	 グリーンコープポテトチップス 主原料：馬鈴薯（国産） グリーンコープ生協	検出せず
9	 プリッツ旨サラダ 主原料：小麦粉 江崎グリコ(株)	0.03	19	 ポテトチップスうすしお味 主原料：馬鈴薯(日本・米国) カルビー(株)	検出せず
10	 うまい棒（コーンポタージュ味） 主原料：コーン（米国） (株)やおきん	検出せず	20	 Doleアップル100% 主原料：りんご 雪印メグミルク(株)	痕跡

LC-MS/MS法による。定量下限はグリホサート0.01 mg/kgで、定量下限未満、定性限界以上の検出があったものは「痕跡」としました。
検査部位について：カントリーマアムはクッキー生地のみ、きのこの山はクラッカー生地のみ、たけのこの里はクッキー生地のみ、パイの実はいパイ生地のみ、ビスコはクラッカー生地のみを使用しました。



はじめに

これまでの調査で、原材料に輸入小麦を使用する製品には、除草剤グリホサートが残留していることがわかってきました(バックナンバーをご希望の方はご連絡ください)。これは、日本では禁止されている、収穫前にグリホサートを散布する「プレハーベスト処理」が海外では認められているからです。これまで基準値を違反は見つかっていませんが*、その検出率は、種類やメーカーを問わず高く、目をみはる傾向があります。

また豆腐などの大豆製品からもグリホサートが検出されることがわかっています。これは大豆でも小麦同様、プレハーベスト処理がおこなわれているからです。

私たちの身の回りには、小麦や大豆を使用したおやつはたくさんあります。「子どもも好きで食べる、おなじみのおやつのあるところから、やっぱりグリホサートは検出されてしまうのか知りたいです」というリクエストに答えるため、今回、遺伝子組み換え食品いらない! キャンペーンさんとママ達が気になる製品、知りたい製品を選び、それを私たちが検査しました。

調べてみると

14製品からグリホサートが検出されました(表1)。小麦製品では9製品全て、大豆製品では4製品、そして今回は、りんごジュースからも検出がありました。基準値違反の製品はありませんでしたが、検出率の高さはこれまでと変わらない水準です。

どうして検出?

今回調査した小麦製品は、原産地表記をしていないものばかりでした。このため、輸入か国産小麦か、またはその混合されたものを使ったのかはわかりません。ただ、国産小麦を中心に使用する製品であれば、表記するほうが、製品にとってメリットとなる場合が多いと考えられますので、表記がみあたらないことに加え、実際にグリホサートが検出された結果を踏まれば、輸入小麦中心に製造されていると考えられます。

胚芽のクラッカー、なぜ高い?

検出のあった小麦製品のうち、最も濃度が高かったのは、「小麦胚芽のクラッカー」でした。全粒粉など小麦の外皮に近い部分を多く含む製品では、グリホサートがかかった部分が多くなるため、高くなると考えられます。

北海道産大豆では、検出されません

北海道産大豆を使用する1製品からは、検出されませんでした。理由の一つとして、北海道では、グリホサートの収穫前散布をおこなわない大豆生産が増えている可能性が考えられます。背景には2020年にホクレンが、大豆の生産と流通あた

って、消費者の要望に応えるため、収穫前にグリホサートの散布がおこなわれた大豆の取り扱いをしないと決断したことがあります。現在、流通しているのは、この決断後の2021年産大豆のはずですから、それが検出の差となったと考えられます。

国産大豆を使用したチップスで検出が認められている製品があります。遺伝子組換えなどの課題も抱える輸入大豆ではなく、国産を使用したいというこだわりから生まれた製品と考えますが、北海道のホクレンのようにプレハーベスト処理をしない生産を掲げる農協や生産組合はまだ多くないようですので、そうした産地の大豆が使用されたためと考えられます。

でも「北海道製造」のきな粉からでてるけど?

「きな粉(北海道製造)」を使用する製品から「痕跡」が認められています。これは北海道産大豆を使用したという意味ではなく、「北海道で大豆をきな粉に加工した」という意味です。原材料が輸入か国産かは、この表記からわかりません。

りんごジュースからも

果汁100%のりんごジュースからも、グリホサートが検出されました。りんご園地内や下草を除草、管理する際に散布されたものが、飛散し、りんごに付着、検出に繋がった可能性が高いです。これまでの調査では、ワインからも検出されることがわかっており、果樹栽培では、園地管理に使用されたグリホサートの飛散による残留が起きていることがうかがえます。

自給率を高めよう、いのち視点の食料生産を

国産小麦からグリホサートは検出されることがわかっています。子どもに心配な成分を食べさせずにすむように、また小麦自給率を高めるためにも、国産小麦を積極的に使用するメーカーを選んだり、原材料を変えるリクエストを届けるようにしたいものです。このグリホサート検出問題の向こうには、経済性の追求ばかりを生産者に押しつけた食料生産から、いのち視点の持続可能な生産へ変革する必要性が見えてくるように思います。

私たちの調査活動は **募金** で支えられています。

募金と分析サポーター募集中!
みなさんの力をお寄せ下さい!



食と農の未来を作る議論を活発にするためには、生産者と消費者の目線で、科学調査をおこえる施設の存在が欠かせないと考えます。是非、私たちと一緒に施設を作っていきましょう。現在のサポーター会員は400人程です。施設を続けていくためには、2000人以上の会員が必要です。身の回りの方にお声かけをお願い致します。



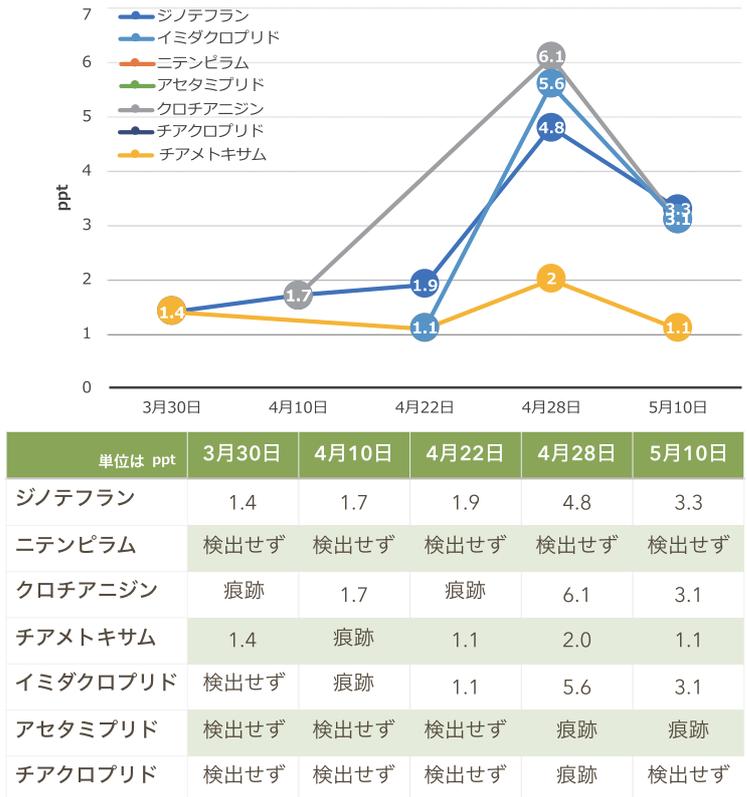
会員登録ページ

*一律基準(0.01 ppm)を超過する製品はたくさんみつかります。ただ、製品を製造する際の加工係数を予想して、原材料の小麦にはどのぐらいの濃度で残留していたかを換算してみると、原材料に使っていた小麦が残留基準値の30ppmを超えて違反していたと考えられる製品はないようです。

ちょっと中間報告 - 水道水のネオニコ調査はじめています -

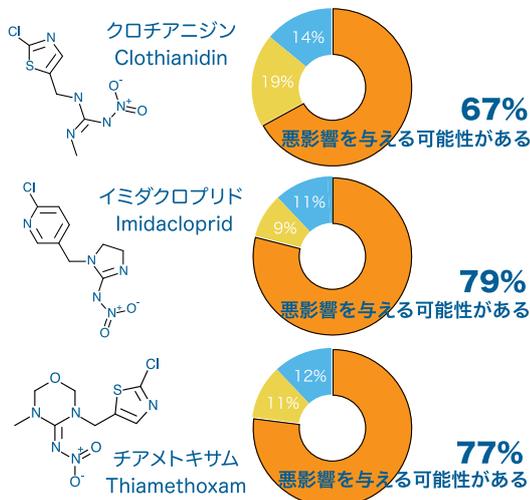
ネオニコ系農薬の影響は、水道水にも及んでいるようです。2022年3月から、埼玉県富士見市に住むスタッフ宅の水道水検査を続けています。農作業が繁忙な季節になるにつれ、濃度や種類も増えている傾向があります(表2)。国の評価では、このレベルで、健康や環境に影響を及ぼすとは考えにくいと結論づけていますが、最近の研究には、無毒性量でもマウスに不安行動を及ぼすこと、発達神経毒性や生殖毒性を指摘するもの、水生生物への影響が指摘されています。近年、大学などの研究機関では、環境や水道水のネオニコ調査が取り組まれ、報告が増えています。今後、その実態が明らかになっていくと考えられます。いま、農作業にネオニコは欠かせない農薬の位置づけにあります。単に、生産者に削減や禁止を押しつけるのではなく、安全で安心な農作物を生産し、届けるという生産者の誇りを共有し、消費者も積極的に関わりながら、行政や大学による支援や技術開発が求められます。ネオニコ系農薬によって危惧されている影響は、天変地異ではなく、人類が作った化学物質を使用することで起きているのですから、それにかわる技術や社会の仕組みもきつと作れるはずで。

表2 埼玉県富士見市の水道水から検出されたネオニコ系農薬



*pptは濃度の単位。0.001mgの物質が1トンの水に溶けているという濃度。

アメリカでも、いよいよネオニコチノイド系農薬規制の動き？



アメリカ環境保護庁(EPA)が、ネオニコチノイド系農薬のクロチアニジン、イミダクロプリド、チアメトキサムの3剤について生物学的影響評価をおこなったところ、アメリカで絶滅危惧種リストに登録のある1,700種のおよそ6-8割に大して「悪影響を与えている可能性が高い」ことがわかりました。2022年6月16日発表されたプレスリリースによれば、EPAは今後、関連機関と協議しながら、具体的なネオニコ系農薬規制強化の施策を検討していくということです。

EUでは、すでに2018年、このネオニコ系農薬3成分の屋外使用は禁止されていますが、いよいよアメリカもEUと足並みを揃える形での規制が進んでいく未来が見えてきたと言えるでしょう。日本では、今のところ具体的な規制を検討する動きはありませんが、この問題に取り組んでいる日本の研究者による研究報告は目立つようになってきており、日本でも今後の動きが気になるところです。

DVD「浸透性農薬(ネオニコチノイド)はヒトにとって安全か？」完成



消費者の「食べて大丈夫なの?」、生産者の「使って大丈夫なの?」という心配に、最新研究をもとに答えるDVDがリリースされました。私たちも制作協力をしていますので、ちょっとだけ出演しています。ネオニコ研究の最前線にいる医師や研究者のコメントをわかりやすく、市民視点で解説しています。制作は、ネオニコ系農薬についての研究助成や運動支援をおこなう(社)アクト・ビヨンド・トラストと社会運動を支える映像を制作するアジア太平洋資料センターです。Youtubeで無料で見ることもできます。



分析センター検査室ニュースは、分析センターサポーター会員(年会費5,000円)にお届けしているものです。購読希望の方は是非、ご登録ください。バックナンバーはWebからも入手できます。